いのちと地域を守る　防災・減災のページ

「個別避難訓練」祖父母と孫と

河北新報社は、東日本大震災の教訓を地域の備えに生かすため、避難場所までのルートを祖父母と孫らが一緒に歩いて確認する「個別避難訓練」を始めた。お年寄りと子どもたちの避難の意欲を育み、課題にも気付いてもらうのが狙い。高知県内で同訓練に取り組む矢守克也京大防災研究所教授と連携し、巡回ワークショップ「むすび塾」の開催地域などで展開する。巨大津波に備え、避難場所からさらに高い所などに逃げる「二度逃げ」も考える。第1回は1月13日、東松島市大曲貝田、宮城県女川町桐ケ崎で実施した。

（イラスト・栗城みちの）

歩いて分かった

＠宮城・女川町桐ケ崎地区

石森勝子さん(70)、未夢さん(11)

■歩道なく狭い道

宮城県女川町桐ケ崎地区は小さな漁港に面した全28戸の集落だった。震災の津波で全戸が水没。今は18戸が浜の高台にある仮設住宅で暮らす。漁業は再開され、漁港にはギンザケなど、女川湾の恵みが水揚げされる。

「地震が発生しました!」。記者の呼び掛けに石森勝子さん(70)と孫で女川二小5年の未夢さん(11)は、居間で身をかがめた。

一家は6人暮らし。勝子さんは、体を動かすことと買い物が趣味。未夢さんはそんな祖母が大好きだ。両親は共働きで、自宅に祖父母と未夢さんしかいない時がある。

100秒間の「揺れ」の収まりを告げると、2人は防寒着を身に着け、寒風を受けながら歩いて避難を始めた。

目指すは国道398号を北上したところにある旧女川三小。震災当日、未夢さんの祖父母と兄が、自宅から急な坂を上り、身を寄せた場所だ。

歩き出してすぐ「ここは危ない道だよ」と勝子さんが教えた。リアス式海岸に沿って走る国道は狭く、歩道がない。道路自体は高台にあるので津波の心配はないが、車がビュンビュンとスピードを出して行き交う。

避難訓練する石森勝子さん（左）と孫の未夢さん。避難ルートには、道路の一部が崩れている箇所もある

未夢さん「崖がいっぱい、危ない」

■路面崩落3ヵ所

まもなく路面の一部が海側に崩落した場所に出くわした。その先も含め、避難路には震災で崩れた路面が計3カ所あった。「早く補修をしてくれるといいけれど…」と勝子さん。未夢さんもうなずいた。

歩きながら「津波が来た時、さっきの急斜面をおじいちゃんを引っ張って登ったんだよ」と話し掛ける勝子さん。当時、ほかの場所に避難していた未夢さんは、驚いた様子で耳を傾けた。

旧女川三小に着いたのは33分40秒後。移動距離は2・9㌔だった。未夢さんは「道路が狭いし、崖がいっぱいあって危ない」と振り返った。

土砂崩れなどで、旧女川三小が避難所として使えない可能性もある。"二度逃げ"を想定して、2人は「この奥にお寺があるよ。そこに避難しようね」と約束した。

勝子さんは愛用のつっかけで歩き続けた。「孫と歩けて楽しかった。いざという時はスニーカーも必要かな」と、日ごろの備えも見つめ直した。

＠東松島市大曲貝田地区

千葉圭悟さん(69)、信子さん(66)、阿部華鈴さん(12)

■ブロック塀多い

石巻湾から約3㌔離れた東松島市大曲貝田地区。訓練には千葉圭悟さん(69)、信子さん(66)夫妻、孫の大曲小6年の阿部華鈴さん(12)が参加した。

石巻市に隣接し、仙台市からも車で約1時間。通勤、買い物に便利な場所だ。一帯に高台はなく、震災の津波では住宅の1階部分が水没した。それでも信子さんは「海が近くて好き」と言う。

華鈴さんは、近くのアパートに両親と兄と暮らす。下校時に祖父母の家に寄り、迎えを待つのが日課だ。

3人は100秒間の「揺れ」を低い姿勢でしのいだ後、三陸自動車道の津波避難階段（当時は整備中）を目指した。

出がけに「定川沿いの道路が近道なんだけど、津波の時に川に近づくのはまずいよね」と圭悟さん。

家を出てすぐ、圭悟さんが「この辺の家はブロック塀が多い」と注意を促す。住宅街の細い道路に入ると、華鈴さんは「車がスピードを出してきたら怖い」と感じた。路地が入り組む場所で、信子さんが道を間違えそうになる場面もあった。

JR仙石線の踏切の先は広い県道。車が行き交う。「車が多くて心配」と華鈴さん。昨年12月7日の余震で津波警報が発令された際は、内陸を目指す車で渋滞した。千葉さん夫妻も「車避難を諦めた」という。

華鈴さん「避難路、車多くて心配」

孫の阿部華鈴さん（左）と、避難経路の状況などを話し合う千葉圭悟さん、信子さん夫婦。奥は訓練当時、三陸道に整備中だった津波避難階段

■"二度逃げ"思案

信子さんは膝が弱く、普段は長い距離を歩かない。他の2人が歩調を合わせ、県道脇の歩道をゆっくりと進んだ。

27分49秒で三陸道の津波避難階段に到着した。移動距離は1・9㌔。信子さんは「こんなに歩いたのは久しぶり。平らなので、必死に歩けば本番も大丈夫」と自信を深めた様子だった。

避難階段を見るのは初めて。圭悟さんは「思ったより狭い。何人いられるんだろう」と見上げた。満員だったり、危険が迫ったりする場合を想像し"二度逃げ"を思案する3人。「三陸道のトンネルをくぐって、さらに内陸部を目指すしかない」と申し合わせた。

華鈴さんは「3人で家にいるときに、きょうの経験が役立ちそう」と振り返った。

個別避難訓練は、大津波を想定し、お年寄り一人一人の避難に子どもたちが同行してルートや避難場所の課題を確認する試みです。現在は高知県四万十町の興津地区を舞台に、お年寄りと子どもたちのグループをつくって訓練を重ねています。

東日本大震災後、全国各地で巨大地震に伴う想定津波高が見直されています。南海トラフ巨大地震が起きた場合、興津地区には20㍍以上の津波が押し寄せると予想され、お年寄りに避難を諦めるムードも広がっています。

子どもたちと訓練することで、お年寄りは「自分も短時間で避難できる力がある。子どもたちが心配してくれる」などと避難する意欲を育んでいます。

津波の記憶が鮮明な被災地では逃げる気持ちは強いと思います。街の姿や生活環境が変わったりして、求められる避難行動が以前とは異なる場合もあります。「津波はもうしばらく来ない」という雰囲気が漂っているかもしれません。

お年寄りと子ども、新しく地域に来た方と津波の経験者らが寄り添いながら訓練し、避難行動の課題を再確認してほしいと思います。

訓練を通じて、互いに震災当時の体験やメッセージを伝え合ってください。意見交換する中で「いざという時は避難する」という約束事や信頼関係を深めてほしいと願っています。

京大防災研究所教授・矢守 克也さん　震災体験伝え合い、約束事確認を

やもり・かつや　大阪大大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士。2009年から現職。11年から京大防災研究所巨大災害研究センター長。専門は社会心理学、防災心理学。「個別避難訓練」や「二度逃げ」を提唱。大阪府出身。49歳。